

名誉市民

竹内俊吉

生誕120周年記念

市立図書館でパネル展



「これだば吾のいちばんの宝物だじゃ」

この言葉は、昭和60年、郷里である木造町から名誉町民の称号記を贈られた際に、竹内俊吉氏が喜びを表して述べた言葉です。

衆議院議員、青森県知事を務め政治家として生きた傍ら、俳句・短歌・小説の執筆を通じ本県の文化運動を牽引した名誉市民・竹内俊吉氏の生涯をたどります。(以下、青森県近代文学館提供の展示パネルより引用)

出精村から上京

俊吉は明治33年、西津軽郡出精村大字林(現・つがる市木造林)で農業を営む家の三男として誕生しました。

向陽尋常高等小学校高等科を卒業後は、父に青森師範学校への進学を勧められましたが、自分の職業が定まることに漠然とした恐れを感じ上京。銀座の文房具店で勤務しましたが、電話対応時に言葉のハンディキャップを強く感じ、3カ月で退社します。

本県の文化運動を牽引

その後は、帰郷と上京を繰り返しながら、文芸誌に短歌や俳句を投稿し、当選を重ねていきました。

大正14年には、旬刊紙発行者の勧めで東奥日報へ入社。昭和4年からは、日曜特集版「サンデー東奥」の編集に従事する中で、多くの雑誌が経営困難で廃刊に至る現実を「東奥日報」紙上で指摘。「県下を統一した文芸雑誌一つに、みんな拠つて行くことにすれば、県下の芸術運動のためにも、その方が強力である」とし、県下統一文芸雑誌「座標」を創刊するなど、本県文化運動の牽引者として活躍しました。その後も、中央の作家に高い原稿料を払って依頼するのではなく、自ら書くことを思いつき、連載小説「海峡」を執筆。青森師範出身の小学校教員を軸に、金と恋愛と義理の渦の中でもがく人々の姿を描き好評を博しました。



昭和45年、宮中園遊会にて長男・黎一氏と



知事就任後も投句を続けた俳誌「春燈」



東奥日報紙面掲載の連載小説「海峡」



当時の様子を伝える記事



昭和53年、サンパウロ市在伯青森県人総会で勲章を受章



竹内氏所蔵の本が並ぶ「竹内文庫」

市立図書館では、竹内氏の所蔵図書を集めたコーナーを設置しています。長男・故竹内黎一氏の愛読書などの寄贈も受け、親子2代約3,000冊の本が閲覧・貸し出しできます。

政治家としても活躍

昭和15年には県議会議員、その後衆議院議員を経て、昭和38年から4期16年にわたって青森県知事を務め、県政の発展に尽力しました。一方、公務の合間には俳誌「春燈」への投句を継続。「知事室で着替るネブタ浴衣かな」もその一つです。

昭和60年、木造町から名誉町民の称号記を贈られますが、翌年、心不全により急逝。没後、遺業を偲ぶ人々により、複数の図書が出版されています。



昭和50年、ねぶた祭りにて



パネル展の見どころ

竹内俊吉氏の生涯をたどるパネルは全11枚。ほかに、句集や蔵書、東奥日報記者時代に従軍した際の写真など、本文では伝えきれなかった情報が盛りだくさんです。

市立図書館副業務責任者の三上みづるさんは「パネル展を通して竹内俊吉氏の生涯を知っていただき、第2、第3の竹内俊吉氏が、つがる市から出ることを期待しております。竹内文庫も貸し出してありますので、ぜひ竹内俊吉氏の世界を味わってください」と話していました。

パネル展は、3月21日まで開催しています。